# 1741年渡島大島噴火に伴う地すべりモデル
# Landslide model of the 1741 Oshima-Oshima eruption

*伊尾木 圭衣[1,2]、谷岡 勇市郎[1]、川上 源太郎[3]、加瀬 善洋[3]、仁科 健二[3]、廣瀬 亘[3]、石丸 聡[3]、柳澤 英明[4]
*Kei Ioki[1,2], Yuichiro Tanioka[1], Gentaro Kawakami[3], Yoshihiro Kase[3], Kenji Nishina[3], Wataru Hirose[3], Satoshi Ishimaru[3], Hideaki Yanagisawa[4]

1.北海道大学地震火山研究観測センター、2.産業技術総合研究所、3.北海道立総合研究機構地質研究所、4.東北学院大学教養学部地域構想学科
1.Institute of Seismology and Volcanology, Hokkaido University, 2.National Institute of Advanced Industrial Science and Technology, 3.Geological Survey of Hokkaido, 4.Department of Regional Management, Faculty of Liberal Arts, Tohoku-gakuin University

1741年に北海道渡島大島付近で発生した津波は，渡島半島や津軽半島の日本海沿岸に大きな被害をもたらした．この津波は渡島大島の山体崩壊に伴う地すべりによって，海域へ大量の土砂が流入することにより発生したと仮定し，山体崩壊に伴う土砂移動の計算をおこなった．渡島大島北側の海底地形調査データ(Satake and Kato, 2001)を用い，山体崩壊堆積物の分布，崩壊前の山体地形の推定，崩壊堆積物の体積の再見積もりをおこなった．これらの見積もりをもとに，地すべり・津波統合モデル(柳澤他, 2014)を用いて山体崩壊シミュレーションをおこなった．その結果，計算による崩壊堆積物の分布と，海底地形データから判読した崩壊堆積物の分布は，比較的良い一致を示す．しかし詳細を見ると，計算による崩壊堆積物の分布は，判読した分布より下流側(北側)に大きく広がっており，側方(特に西側)へは広がりが少ないことがわかった．また計算による崩壊堆積物の厚さも分布と同様，判読した厚さより下流側(北側)に多くみられる．今後，モデルパラメーターや崩壊前地形の調整などをおこない，改良した地すべりモデルを用いて津波シミュレーションをおこない，津波痕跡との比較をする．

キーワード：地すべり、津波、渡島大島
Keywords: landslide, tsunami, Oshima-Oshima

©2016. Japan Geoscience Union. All Right Reserved.